
教育現場における「声」表現の薦め

—朗読劇をもとにした「声」への興味喚起—

The Power of Vocal Expression in Education —Enhancing Interest in “Voice” through Declamation—

渡邊 史
Aya WATANABE
滋賀大学教育学部

<キーワード> 声 言葉 朗読 表現 教育

本稿は2015年滋賀大学教育学部「学部プロジェクト」にて行った朗読劇イベントの実施に関する報告レポートを下敷きとしたものである。またここでは、教育現場において汎用性のある「声」の取得、およびその「取得機会の実現」に関しての提案をする。教育学部に在籍して学びを進め、いずれは教師として多くの児童生徒と対する学生が、「力ある声」をもって現場に立てるように、そして彼らの指導の成果として、子どもたちが「声」による自己実現へと向かって行けることを願い、教員養成課程および、教育現場での「声」に対する意識づけと育成のために【朗読劇】の実行を有効な方法として提示したい。

1. 声・言葉の力… その影響、効果

教育学部の学生たちが直面する問題に『声』に関することがある。「はっきり話せない」「言葉が伝わらない」「話がうまくできない」など、声を用いた表現およびコミュニケーション不全に関わる事であり、教育実習を終えた後、これらに関する相談を受けることが多い。自身のやるべき事、やりたい事は明確であるのに、それを外に発信・発現することができない、という事実は学生にとって想定外のことらしい。「声」、そして「言葉」、いずれも日常で文字どおり無意識に使ってきたものが、有効でない…その状態は彼らにとってショックであり、また、たった数日の実習期間、真剣にその手段を用いた(声を一生懸命使った)ところ、手段そのものが使用不可能(声がつぶれる等)になってしまったりもすることに驚き、落ち込んでいる。

ヒトのコミュニケーション手段としてもっとも汎用性の高い物は「声」であり、生まれたその時から声をもって主張し、生育過程において声は多くの「情報」を内包すべく発達させられていく。この「情報」とは、心情・感情であるが、それらの情報を表すのは、声の持つ要素のうち、「音色」である。人間は大半の会話をこの「音色」によって構築している。例えばビジネ

ス分野のコミュニケーションスキルアップ講座等で、『メラビアン』の法則』がしばしば注目されてきた。これは「対面コミュニケーション時、相手への印象は●言語情報 (Verbal: 7%) 話の内容、言葉そのものの意味●聴覚情報 (Vocal: 38%) 声の質・速さ・大きさ・口調●視覚情報 (Visual: 55%) 見た目・表情・しぐさ・視線によって決まる」、というものだが、この「聴覚情報Vocal: 38%」の割合はかなり大きいものと言える。

筆者が公立小学校を訪問した折の体験を例示しよう。そこでは【ふわふわ言葉・ちくちく言葉】という掲示があった。【ふわふわ言葉】とは、相手に対して優しい、暖かい、快い気持ちを引き起こさせるもの、【ちくちく言葉】とは、哀しい、辛い、イヤな気持ちにさせるもの、という定義で児童に言葉を上げさせ、模造紙に書いた木に実が生っている風の体裁であった。【ふわふわ言葉】の例は「ありがとう、すてきだね、かわいいね、たのしいね、友達だね」など、【ちくちく言葉】の例は「きらい、バカ、あっち行け、そんなの知らない」など、それぞれ10程度があった。しかしここに挙げた例のいずれも、「ちくちく」「ふわふわ」の区別は非常に流動的で、すべては「言い方」による。法則内38%の聴覚情報 (Vocal)、すなわち、声の質・速さ・大きさ・口調といった、「言い方、声音」によって、言葉は発信者の心的情報を付与される。つまり言葉はそれを構成している「音」そのみで意味を成すのではなく、むしろ音楽的な、「音の三要素」である「音の大きさ・高さ・音色」でこそ成っていると言えよう。

声の発し方ひとつで印象が変わり、そこから導き出される結果が変わる。この事をどれほどの人が真摯に受け止めているだろう。例として、2011年東日本大震災時の「東電」に関わる数々の事について挙げたい。当時、日本国民は大きな恐怖と憤りを感じていた。筆者もその一人であるが、驚いたのは東電という組織がスポークスマンを擁していなかったことだ。どう言い

つくろっても事実は事実であり、誰が知るにしろ知らないにしろ真実も放射エネルギーも健康被害も変わらない。しかし、その「伝え方」ひとつで印象が大きく違い、社会を動かすほどの力が備わっているのも事実である。

別の例として、アメリカ合衆国大統領報道官に注目する。この役職者はプレスに対してホワイトハウスの発表を読み上げたりするほか、大統領のスケジュール、コメント、公式見解などを発表するスポークスマンであり、地位としては主席補佐官に次いで高い。これは政府とプレス間において適切に情報開示を操作し、時にはメディアを操作するほど重要なポストだからだが、日本国内においてはどうか。同様の役を担うのは内閣官房長官だが、日々の内閣発表を見聞きする我々は、この役職者をとおして「政府への印象」を持つことに他ならない。「施政側に属する者＝国会議員の発信」に注目すれば、国会答弁をはじめ政治家たちのインタビューなどの発言が我々が触れる「政府による発信」の機会であるが、しばしば見聞きするのは「話し方」「喋り方」におよそ気を配っているとは思えないかのような様、「原稿にかじりついて棒読み」ともとれる様である。米大統領報道官、米大統領、また先ごろの大統領選挙時の候補者たちと比してどうか。日本の施政に携わる者たちの様子はスピーカーとしての発信時、その演説内容をさらに積極的に聞きたいと受け手側に思わせる事に成功していないように思える。この、国ごとの大きすぎる違いは、けして発信者個々のものではなく、歴代に総じて見られることだ。

アメリカにおける大統領の選出方法は実質的な直接選挙であるため、いかにその「スピーチ」で有権者を惹きつけるかが重要である。原稿はメディア戦略担当者ら側近たちの意見を下敷きとしたスピーチライターによって書かれたものであり、発信者はスピーチそれ自体の練習のみならず、その仕方…口調、間、抑揚、身振り、視線の配り方、またヴィジュアル面…服装、髪型、メイクのコーディネート係のアドヴァイスも取り入れつつ、それを構築していく。全員が一丸となって臨むのは、そのスピーチがより効果的に聴取され「心に刺さる」(スピーチライター：蔭山洋介氏の表現)よう、最大限の配慮をするために他ならない。これはアメリカにおいて「レトリック(修辞学)」体系が政治文化に根を下ろしているからだと考えられる。修辞学は古代ギリシアに起源をさかのぼる、弁論で聞き手を説得し納得させるための術に関する教えである。「いかに聴衆を納得させるか」を目的とする多分に政治的なもので、演説をより魅力的にし、聴衆の心理に影響を与えるための身ぶりや発声なども重要視される…つまり言語学、詩学、演技論などの総合的なものだ。もとは古代・中世の教育規範である自由七学芸の内のひとつであり、現代においては「文章作法」、「ディベート」、

「クリティカルシンキング」、「アカデミックライティング」、「メディアリテラシー」、「プレゼンテーション」、「論証法」、「コミュニケーションデザイン」等と名を変えて存在している。アメリカでは幼少時から、「自分で、自分の意見を、相手に納得させるように言う訓練」を施される機会が設けられている。意志を通すためには言葉を活用しなくてはならず、その言い方により不利益を被ることも多いため必然的に「現代における修辞学」たるディベート能力が幼少時から要求され磨かれざるを得ないのだろう。これはもう「風習」と言っても過言ではないのかもしれない。そういう土台があり、さらに人前に出る政治家ともなれば発音や発声、話し方、立ち方、視線の配り方など全てに「プロ」が関わり、グレードアップを重ねていくのだから質の向上は当たり前で、もはやそれは「見世物」…エンターテインメントの域にも達する。日本における政治家の発信力とは比べるべくもない。

2. 「声」への目覚め、憧れ

近年日本において「声」への興味、注目度は上がっているように思う。『イケボ』という言葉がある。これは「イケメンボイス」を略したものであり、イケメン、つまり「美形の男性が喋っている、歌っているのだろうと思わせるような声」のことを指す。主に声優への賛辞として用いられることが多いが、ジャニーズ事務所の所属グループSexy Zoneメンバーも、ラジオ番組の中で「イケボになりたいんです」「次のメール、イケボっぽく読みます」のように発言していたので、若年層には浸透している言葉であるようだ。言葉自体は、声優の中でも「美声である」とみなされる人への賛辞的に使われ出したのが起源である。

1960年代民放テレビ草創期からの「第一次声優ブーム」の担い手は、野沢那智(アラン・ドロン、アル・パチーノ、ブルース・ウィリスの吹き替え等)山田康雄(クリント・イーストウッド、ジャン＝ポール・ベルモンド、ルパン三世等)、納谷悟朗(クラーク・ゲブール、チャールトン・ヘストン、ジョン・ウェイン、銭形警部等)、大塚周夫(リチャード・ウィドマーク、チャールズ・ブロンソン、ピーター・セラーズ等)らであり、映画の主人公や演じる映画俳優の人気とあいまって多くのファンを成した。続く1970年代後半から1980年代前半までの「第二次声優ブーム」は『宇宙戦艦ヤマト』『銀河鉄道999』等のヒットによるアニメブームと並行して起こった波である。神谷明、古谷徹、古川登志夫、水島裕など、美形キャラクターを持ち役とする声優たちは声による芝居のみならず並行してトークと歌のライブやレコーディングなどを行い、一大市場を成した。この頃から「声優」は舞台役者の余技ではなくなり、初めから声優を目指して道に踏み込む者たちが登場し始めた。1990年代中頃からの「第三次声優ブー

ム」の特徴としては、本業に留まらず、歌をうたい、CDを発売しライブを開催、また声優専門誌のグラビア等に登場し、写真集やイメージビデオも発売するなど、「声優のアイドル化」が挙げられる。そして2000年代から現在にかけては深夜枠アニメ放映、テレビや映画メディア発ではない家庭用ゲームオリジナルキャラクター音声の必要により若手声優の登用が顕著であるが、これらに関わる声優は、第一次、第二次ブームの立役者たちが講師を務める養成所にてトレーニングされており、「声優になるためのノウハウ」を実地に学んで市場に出ている。こうして「声優」という職業は現代において若者たちが興味を持ち憧れ、かつ「目指す」職業の一つになった。

声優希望者は年間5000人にも上るらしい。若年層向け職業情報サイト『13歳のハローワーク公式サイト』の行った「なりたい職業ランキング2016年10月」において、声優は31位/100であった(昨年34位)。他の順位を見ると1位：金融業界、2位：プロスポーツ選手、3位：臨床心理士であり、声優のランク近辺を見ると27位：漫画家、28位：PA(音響)、29位：グラフィックデザイナー、30位：獣医、32位：アニメーター、33位：作家、34位：インダストリアルデザイナー、35位：幼稚園教諭、36位：アパレルメーカー、37位：歌手、38位：テレビ業界…と続く。ちなみに小学校教師は20位、政治家は45位である。

ラジオ番組『スパロボOGネットラジオ うますぎWAVE』から「就活の面接で若本規夫の物真似をすると採用される」という噂が発されて注目を集め、さらに「やってみたら実際に内定を得た」との投稿が番組に寄せられたという。若本規夫氏(1945-)はCM、アニメ、映画、ナレーション、悪役からコミカルなキャラクターまで演じる実力派声優であり、「若本ヴォイス」と畏敬を込めて称されるなど同業者からも尊敬を集めている。氏の声の特徴として、「●渋い●抑揚のつけ方が独特●巻き舌の使い方がすごい」などが挙げられているが、この「渋い」と評される声は具体的にどのような要素を持っているのだろうか。辞書によれば「渋い」とは「派手でなく落ち着いた趣。地味に味わい深い様」と説明されている。しばしば「渋い声」として例に上がる人物は、竹野内豊、中尾彬、阿部寛、玉木宏、大和田伸也、竹中直人、水嶋ヒロ、などだが、いずれも音声は「低音」寄りである。『声総研』の行った声についてのアンケート『モテ声ランキング(2011年/20-50代男女800人を対象に実施)』によれば、【モテ声有名人・男性部門】の第1位は福山雅治、以下、川島明(麒麟)、玉木宏、森本レオ…と続く。同時に行われた【得声(声が良いことで得をしている、と思う人)ランキング・男性部門】では第1位ケンドーコバヤシ、以下、川島明(麒麟)、天野ひろゆき、山里亮太、原田泰造と続く。ここでもランキング上位には「低い声」

が持ち味の人々が選ばれている。同アンケートでは「モテ声要素」にも言及しているが、第1位：深みがある声、第2位：低い声、第3位：太い声、第4位：色っぽい声、第5位：甘い声、であった。「女性モテ声要素」は第1位 澄んだ声、第2位:色っぽい声、第3位:甘い声、第4位:深みがある声、第5位:ハリがある声、であり、ランキングでは第1位が仲間由紀恵、以下、真矢みき、吉瀬美智子、黒木メイサ…と続く。この結果から男女ともに「落ち着いた、深みのある、抒情性を備えた(甘い・色っぽい声)」を好まれるという傾向が読み取れる。

「声の高さ」が対人時に与える影響については、ビジネス指南的カテゴリから多くの情報が発信されている。仕事・恋愛・生活情報を扱うサイトをいくつか検索すると、「高い声よりも低い声の方が何かと得をすることがあります」「仕事では、高い声の人よりも低い声の方が話に重みがあり、説得力が生まれます」等の記述が多く見られる。『カンロ株式会社』が2011年9月20-50代男女800名に行った調査結果のまとめによれば、8割以上が「声がいいと仕事面でも恋愛面でも得をする」と考えているらしい。その一方、同調査にて「自分の声に自信がある」と答えた人は26.6%、つまり「自分の声には自信がない」という人のほうが圧倒的に多いという事になる。そして前出『声総研』調査によれば、79.2%の人が「いい声になりたい」と思っているようだ。

このような希望を持つことは正しい。前述したように、ヒト相互のコミュニケーション手段として「声」は汎用性が高く、中でも教育現場は「声」にあふれており、ことに教員と生徒の間は日々その共有時間の大半が「声と言葉」によって繋がれていると言っても過言ではない。教員たちは自分の声・言葉に自信を持っているだろうか。そしてどれほど、そのもたらす「効果」に気を配っているだろう。教師が他の職業従事者より声・言葉を用いる機会が圧倒的に多いことは自覚していよう。それは、声帯の故障(ポリープ、結節など)に見舞われる割合の多さが、職業として、歌手、アナウンサー、俳優、教師…にあるというデータからもうかがえる。筆者も滋賀大学に勤務する4年間に現職教員から声についての相談を受けて来たが、そのうち5例は明らかに声帯に故障を抱えており、3名は耳鼻科にて結節またはポリープとの診断済みであった。教員は児童生徒に「声をもって」向かい合うが、教員、またはそれを目指す教員養成課程に身を置く生徒たちが自分の「声」それ自体に「興味を持つ機会」は、圧倒的に不足している。この事に対する問題意識を下敷きとして、大学の中でその「機会」を設けるべく、筆者は一つのプロジェクトを提案した。

3. 朗読劇の提案・実施

滋賀大学教育学部「学部プロジェクト研究」の募集

は、その採否において1. 教育学部の充実・発展に寄与する研究であること。2. 現代性・緊急性の高い研究を優先する。と規定している。研究助成申請時の提出書類から「目的と概要」の一部を以下に転載する。

本研究は、教育学部に学ぶ学生に「研究の過程そのもの」を体験させることが大きな特色である。ひとつの「行事、イベント」を計画、遂行するためには、一定の轍を踏まなくてはならない。これはオリンピックのような大事業でも、教育現場における催しでも、規模程度の差はあれ同じことである。それを行う時に何を考え、何を目的とし、どうやって歩みを進めればそこへ到達できるかを知るためには、「ことを成し得る過程」そのものを体験するしかない。そもそも「目的」「目標」「到達点」を設定するにしても、それがどの程度のものなのか、その基準は個々のそれまでの成長過程における知識、経験、美学に照らして算出されるものであると言えよう。一中略一 同時に、教職にある者として身につけておくべき「声」の表現についても、本研究をとおして学生のスキルアップを目指したい。音として確立し、他者に対して明確な影響を与えられる力ある「声」。それを発するには、身体的な部分のみならず、意識的な要素も大いに影響する。「他者に伝わりやすい声」を模索することは自分自身や対人関係を客観視する体験となり、自己理解、ひいては他者理解にもつながると考える。

イベントの遂行にあたり、工夫したのは3点である。

(1) 題材の選択

実習や試験に影響の少ない時期として12月の年内授業期間最終週に公演日を決定、題材としてポピュラー性・汎用性が高いものであるという点から、「クリスマス」を取り上げる事とした。オリジナル台本を作成したことにより著作権等の問題も回避される。同時に個々の持つであろう宗教観にも配慮し、偏った宗教的思想を持ち込まないよう、聖書からの記述を元としたイエス・キリストの生誕について扱いながらも「物語」「言い伝え」の態を失わないよう文体等に配慮した。この「著作権、宗教観」については、教育現場でも実際にしばしば問題になることが多いこと、その事例および対処の例についても参加学生に周知した。

(2) 参加者の人集

なるべく参加者が多学年・多専攻専修にまたがった状態で展開できるよう意図したことで、広い範囲から人が集められた。観客動員にも策を講じ、日常的に通行量の多い廊下に面した「視聴覚室」を会場とした。稽古時も同室を頻用し、常に扉を開放して稽古に取り組んでいた。通行中の学生や教職員が覗いて「何か変わったことをしている」と興味を引くこと、当日も「たまたま通りかかった」人が気負いなく鑑賞に訪れられるであろうことを期待しての場所選択であった。

(2) 情報、内容の周知

主に稽古を設定した昼休みは、サークル活動など学生にも都合がある。そこで稽古欠席時にも内容を把握し、ストレスなく次に参加できるようなシステムを持っておく必要があると考え、「稽古ノート」の共有を取り入れた。これは中学、高校など教育現場の部活動等にでも取り上げられている方法であり、稽古内容の確認のみならず、要点・課題の見直しもでき、ノート共有者が同じ条件で情報を共有できるというメリットがある。また、過去に遡って内容を振り返り、いつでも全体を見通すことが可能である。しかし前述したように参加者の所属は多学年に渡るため、一度に連絡を取ることが難しい。そこで民間の無料連絡網システムを使用することにし、幾つかを比較して株式会社イオレの展開する『らくらく連絡網』に決定した。類似のシステムは数多くあり、いずれも企業PR広告の表示がサイトやメールに挿入される事を条件として無料で使用できる。『らくらく連絡網』は「出会わない系サイト」という運営元の方針から広告には出自の保証されたものだけが採用されており、他大学のサークルやゼミ、またPTA等で使用されているという実績がある。今回も連絡網使用目的のカテゴリを「大学・学校」と指定することで「公文」や「家庭教師派遣」など教育関連の広告が大半であった。大容量のファイルや画像アップロードも可能であり、システムメール機能にて「出欠確認」や「投票」もでき、掲示板機能でweb会議も行えた。使用者は自分に都合の良い環境(パソコン、スマートフォン、ブラウザ使用、アプリ使用等)にて閲覧、使用することができる。出演者には無料連絡網の使用をあらかじめ説明し、アドレス登録をさせている。

4. 朗読劇…稽古の進行

全ての学生が素人どころか「朗読初体験」である。まずはラジオドラマやCDブックを紹介し、自分たちが取り組む事のイメージを共有するところから開始した。TV番組からも参考になりそうなものをピックアップし、視聴を促した。そして、朗読箇所「読み方」を大きく3パターンに分類し、当てはめながら取り組んでいった。実際の指導をもとに、以下にまとめる。

(1) 読み方分類

① ニュース報道的 箇所

通常の「ニュース番組」の中心を占める報道部分(事件、事故、政情等)的な読み方…話者は私情を交えず、公平な立場を保ち、ニュートラルに事実を発信する。

② キャスター的 箇所

報道(発信)している内容に対して自分が持つ意見・意志を反映し、共感や批判などの感情を伝えるための息づかい・音声を心掛けながら読む。例えば、物語周囲や自然事物の描写などには、その雰囲気や空気を自身が享受している風を持ちながら読む。

③ 情報コーナー的 箇所

ニュース番組の中でも楽しい話題や季節の話題、イベント情報など、視聴者の心を積極的にキャッチしようと意図しているコーナーのように特別感をもって読む。例えば「羊飼いたちのもとに現れた御使いがうたった歌」の内容説明部分は、明るさ・喜びを感じさせるように、さらに次に演奏される楽曲前奏の雰囲気・テンポを予測させるようなもの…等と心掛けさせた。

(2) 言葉・声の発し方、読み方の知識・注意

①「語頭をたてる」意識

日本語はその大半の単語で「語頭」に重きが置かれている。学生にとってなじみのある英語を始めとした欧米諸国の言語とは異なり長母音・短母音の別がなく、なだらかなリズムとして発される。「語頭がキマる」ことで話者にも聴者にも単語の区別が明確になる。

②「語尾の位置」を意識

わかりやすい例は、語尾の音を上げるか(疑問)下げるか(断定)によって意味が変わる事だ。発する言葉の意味や効果をあらかじめ想定した上で語尾の音の高さを決め、コントロールして発する。小学校の卒業式でしばしば聞かれる「単立ちの言葉」等と称されるエール交換調の出し物…児童生徒が順番に言葉を叫びあうアレ…が、その現場以外ではまったく聴かれないような独特の不自然さを持ち、「卒業式」という特別な場・空間であることから呼び起こされる感情を差し引いて聞けば空虚かつ陳腐な印象が否めないのは、語頭と語尾の「音」が全て同じ音高から始められ同じ音高で終わっているのが理由の一つである。全てがあまりに単調なのだ。演劇・声優の養成所で行われるメソッドに「文章の開始・終止部分をすべて違う音域にする」物があるが、これも意外なほどに難しい。ことに語尾の発音には問題が大きい。学生に「普通に」文を読ませてみると、語尾が投げ出すように発されたり、不自然に消えてしまうことがままある。「～である。」の時はさほどでもないが、「～だった。」「～だ。」の時にそれが顕著だ。改善するには最後の母音まで力を抜かない事だが、実際に物を置きながら発してみる、丹田を手で押すなど、体感と連動させると分かりやすいようだ。

③ 長い文章の進路と勢い

句点を含まないがある程度の長さのある文を読むとき、間をどこかで取ってしまうことがある。しかし、「あえて」一気に読み下すと、その長さや勢い自体が力を持っていることに気付く。取り組む文章それ自体の長さを把握し、気構えを持った上で一気に呵成に読む。ここで有効なのは、筆を持つ態にて空間に声と共に「エアで」線を描いていくことだ。日本語の場合は縦書きであるから、重力に逆らわず大きく縦線を描きながら行くと、体感として分かりやすい。歌唱の場合も同じ効果が期待できる。ひとつの文節を歌う時、そこにブレス(息つき)や休符、歌唱しない小節が挿入されてい

たとしても、本来の詩に備えられた文末へむけての流れ・勢いを意識して取り組むことにより、詩人や作曲者が意図したであろう「流れ」を表すことができる。音の切り方・続け方は重要であり、セリフ術における「アーティキュレーション」の意識がここに当たる。

④ イントネーション

知っているようで迷う単語のイントネーションや、文脈によって発音が変わる部分などは、矢印などの書き込みをすることで母音の向きを自身が納得し、母音の要求する高低の方向を明確に把握する。

⑤ 母音の連続部分、母音語頭の意識

例を挙げると「また明るい」など、単語の語尾母音と次の語頭母音が同じ場合、「Mata / Akarui」のように「紙一枚分の間」を意識的にとり、語頭の母音は声帯で一度、確実にストップをかけ、新しく作り直して発するよう心掛ける。

⑥ 記述内容の立体的理解

「牛や馬のいる厩の隅に身体を休めることにした」など情報量の多い文章は、実際にその単語の意味する物、示す物を思い浮かべ、一度「脳内で視覚化」してから言葉として発すると、そこで必然的にかかる時間が、発する言葉に余裕を持たせてくれる。また、その文内で中心的と思われる単語を基準に文を展開していくようにするとメリハリもつき、聞き取りやすい。セリフ術における「プロミネンス」…特定の言葉や文節を意識的に強調し目立たせる方法、また状況に応じて心情や情報を効果的に伝えるための区切りである「フレーズ」の意識もここに加わってくる。

⑦ 聴者の意識、理解速度への配慮

⑥のように話者自身が「文字を見る→視覚化する→言葉を発する」までに一定時間かかるのと同じように、聴者も理解するのに同じだけ時間がかかる事を意識する。相手にとって全てが「初めての情報」であるのに配慮し、相手が「音を耳にし→言葉として認識し→脳内で情景を視覚化できる」までの時間を、余裕としてじゅうぶん取るよう心がける。

⑧ 空間の意識

全員で「息を合わせる」にはどうすべきかを工夫する。オーケストラの方式を借り、「コンサートマスター」を下手(客席より向かって左手)端に、その対面に「サブコンサートマスター」、集団中心に「センター」を、一人ずつ置く。この3名を中心に「息を合わせる」ことで、集団全体がタイミングを測ることができる。要部分が客席にある扇形に陣を張り、メンバー同士が互いを視界に入れられるようにする。コンサートマスターは、立ち座りや読み出すきっかけなどを統括する立場であり、学生同士の話し合いで人選決定させた。

また、客席も含めた「空間」を意識することは稽古時から行った。自分の発する声=音が、会場の空気を具体的に動かすようにする。「会場の天井を面で鳴ら

す」「天井部分の空気に声の通り道をあらかじめ設置しておく」「相手の耳にゆっくりと言葉を注ぎ入れる」「言葉を後ろの壁に印字していくように」「5歳の子供がじゅうぶん理解できるように」…など、メンバーの想像力をかき立てつつモラールを喚起した。

5. イベントの成果

結果は満足のいくものであった。イベント開催後にアンケート形式(無記名)で参加者の意見聴取を行ったが、いずれの学生も新しい知識・体験を驚きや喜びをもって受け止めており、このプロジェクトへの参加を経て自分の成長につなげ、手ごたえを感じている事が分かった。また、イベント当日には多くの学生、教員、職員が鑑賞に足をはこび、およそ60名の集客となった。パフォーマンスを行う側としても、多くの耳目に「表現」を届けようと気概が高まる。観客に記入依頼したアンケートにおいても、朗読劇それ自体が好評であったことが読み取れ、学内における「季節のイベント」としても十分に機能したことは大変に喜ばしい。

出演者に向け事後に行ったアンケート質問例は以下である。出演学生合計21名中、15名が回答している。

■1. Pageant への当初持っていたイメージと、参加後の認識はいかがでしたか？一つ、お選びください。

・良いものだった・つまらなかった・よく分からない

■2. Pageant の体験はいかがでしたか？

■3. 今回得た知識・体験を通じて得た物の中で、当てはまるものを以下から選択してください

■7. その他、自由記述

回収したアンケートからいくつかを以下に挙げる。1. に関しては、回答者全員が「良い物だった」としている。2. に関しての選択(複数可)からは *興味深かった *新しい知識・経験が嬉しかった *楽しく参加できた *新しいことに出会えて有意義だった *成長できる時間だった *充実していた *難しいが、何とかあった *想像していたものとは違いモチベーションが上がった…が多く選択され、自由記述には *神聖なものに出会えた時間だった というものがあった。1名ぶん *正直、イヤだった という選択もあったが、同人は自由記述において「やっているうちに、もっと、という意欲が出て来ました。-中略- ためになる機会でした」とあり、肯定的な気持ちで終えていたことが読み取れる。3. に関して、参加学生が「新しく得た有益な事」として *クリスマスの起源についての知識 *「朗読」というものの存在それ自体 *「朗読」の技術に関すること * 様々なクリスマスの音楽 *演奏についての知識やヒント など、教養や知識を深められたことに対してももちろんだが、イベント運営上必要な事々・知識に対して「有益だった」としているのは嬉しい。例えば、*共有すべき情報の伝達方法 *「集団芸」の難しさ *「見世物」を作成するための進行方法、およびその過程 *

進行過程の全体周知の必要性 *各人のモチベーション・取り組みへの温度差 *「集団芸」の魅力・意義 *自分以外の他者が保持する能力について *役割と責任について、などの言葉からそれがうかがえる。学生たちには自分たちの責任において自主的な行動を促したが、そうすると「立案の得意な者」「フォローの得意な者」「センスの良い者」「率先して動くもの」「疑問・興味に面白い着眼点を持つ者」「技術の秀でた者」などの存在が際立つ。そのような者たちが中心的に動く中、「殻を破れない自分」「人任せにしてしまう自分」に出会うこともあったようで、*自分には向いていないということが分かった、と述べていた者もある。

「声の担う効果」に関しては回答者全員が言及していた。ほんの少しの意識づけ、明確な意思を持つ事で、もたらされる効果が明らかに変わるのを体感したのだから大いにそれはうなずけるし、これも当研究の目的であったのだから、非常に喜ばしい。

7. の自由記述部分から印象的なコメントを転記する。「最初の稽古が始まった時からどういう風になるのだろう、とドキドキワクワクしたのを覚えています。仕上がっていくにつれ緊張と不安と楽しみに変わっていき、Pageantに親しみをもちました」、「音楽のレッスンで言われている”言葉を読むように歌う、言葉で歌う”ということがよく分かりました」、「一応それなりに完成しましたが、もっとできたかも、と煮え切らない思いがあります」、「人前で何かをする機会があまりないので、その難しさや気を付けるべき点に分かり、これから生かせることがたくさん見つかりました」、「普通に過ごしていたら会う事がなかった人たちと一緒にやれ、その人たちの新たな一面(ステキなところも、ただけいけないあ…なんてところも)を知ることができました」、「集団でなにかを行うことの様々な効果や問題などを学びました」、「何も分からないところから先生の指導方法も含め、一つのパフォーマンスに仕上げていく過程を体験できてよかった」、「技術だけでなく、気の持ちようや伝達方法など様々なことを学びました」、「終了後にお客さまから感想をいただいたとき、とても嬉しくて、やってよかったと心から思えました」。

6. “声”を“用いる”ために

教育学者、作家である齋藤孝(1960-)氏の著作『声に出して読みたい日本語』(2001年草思社)は、日本のことに教育現場における声と言葉の扱い方、考え方に大きなヒントを与えたと言えよう。「いま、暗誦文化は絶滅の危機に瀕している。かつては、暗誦文化は隆盛を誇っていた。小学校の授業においても、暗誦や朗誦の比重は低くなってきているように思われる。」という論に共感する。氏は活動において、日本語を言語そのものだけでなく、それを扱う能力をコミュニケー

ション力として活用したり、言葉・声を発することを健康に生かす方法などを提言し、心技体の全て、およびその関係性を視野に入れた教育論を展開しているようだ。2003年からNHK・Eテレにて放送が開始された『にほんごであそぼ』は同氏による企画・監修・総合指導により、現在も同放送局の人気番組である。また、氏の著作は専門である教育、教員養成の現場以外にもビジネス書や自己啓発書として活用されているが、これは近年の日本国内において「声・言葉」に対する興味が拡大し、その重要性が認知され浸透してきたからではないだろうか。

文科省は現在、教育の方針として「言葉による表現」を重視している。『学習指導要領 生きる力・第1章「言語活動の充実に関する基本的な考え方」カテゴリ、およそ7,100文字で構成されたうち、キーワード的な単語がそれぞれ何回使われているかをカウントしてみたところ■言語／49回、■言語活動／28回、■言語活動の充実／13回、■コミュニケーション／7回、■表現／15回であった。強く主張されているのは、「言語活動の充実」である。「課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力を育む」「国語力の育成を中核とし、言語力の育成を図るため、知的活動、感性・情緒、他者とのコミュニケーションに関することに特に留意する」「言語が知的活動（論理や思考）の基盤であるとともにコミュニケーションや感性・情緒の基盤でもあり、豊かな心を育む上でも、言語に関する能力を高めていくことが重要であることから言語に関する能力の育成を重視し、各教科等において言語活動を充実する」などの記述によりそれらは説明されており、具体的には「話すこと・聞くこと」や「書くこと」、「読むこと」に関する基本的な国語の力を定着させたり、言葉の美しさやリズムを体感させたりするとともに、発達の段階に応じて、記録、要約、説明、論述といった言語活動を行う能力を培う必要がある。」としているが、ここでも「言い方・話し方」についての言及はなく、「言語表現」への取り組みとして不十分であるように思える。

演出家 鴻上尚史氏の著作『あなたの魅力を演出するちょっとしたヒント』に、このような記述がある。「たとえばメイクアップなら、『目の細い人はこういうメイクが似合う』『唇の薄い人は…』と、“センス”を“技術”の問題にして、なんとかその魅力を伝えようとしてきたのです。男性なら、髪が薄くなった時に、どういふ髪型にすればいいかなんていう問題もあるでしょう。しかし、声に関しては、こういう動きはほとんどなかったと言っていると思います」。氏は、これまでの日本社会において、語る「内容」については多くの考えが巡らされてきたが、それを語る「声の魅力」について言及される事はなく、それで損をしている現場が多かったと述べている。そして「自分の声を知り

それを「有効に創造的に使う術」を知る事こそが表現力の要であり、自己実現の術、すなわちコミュニケーションの第一歩であるとしている。

現在、筆者は初等科免許必修授業である『初等音楽科内容学』の音楽カテゴリを受け持っている。歌曲にはかならず詞＝言葉があり、そこからインスパイアされた心情を音に映していったものが「歌」である…したがって、歌をうたうとは、「言葉」要素と「音＝声」要素がより高みで出会う現象なのだ…という観点から指導しており、授業は「詩の朗読」から始まるのだが、学生たちは「まともに」読むことができない。様々に考え、感じ、想っているのにそれを表現する「術」を知らない…というか、術が「ある事」を知らないかのようだ。筆者自身が手本として「表現」して見せると、彼らはそれを「魅力的」「面白い」「興味深い」「やれたらすごい」と思うらしいが、方法は「分からない」。いくつか方法を伝授するが、「え、そんなこと？」という程度の些細な事だ。取り組んでみると最初は難しいかもしれないが、やっているうちに慣れてもくるし、何よりその効果を自覚できる。「そう、こう言いたかった」「この手があったか」と気づいたら、後はそれを習慣的にやるだけ、なのだ。「初めての感覚だった」「こういう言い方や声の音色の知識は必要だ」「言い方で印象は絶対に違う」「これからはちゃんと話せる気がする」「やりたいと思っても難しい。悪いクセが染み付いていてできるか不安だ」「いいかげんに喋っていた自分に気づかされた」…授業のリアクションペーパーにて寄せられた学生の感想である。その中に興味深い言葉があった。「思い出しても、小学校、中学校、高校、先生たちはみんな、いまの自分と同じように話していたと思う」。これが事実だろう。だから始末が悪いのだ。

鴻上氏の別の著作にもこのような例示がされている。「卒業式や入学式で、教育委員会とかの偉い人が、“中国の諺を引用した人生の話”なんかをします。下を向いて、前日、さんざん書き直したであろう原稿を、ぶつぶつと読みます」「本人はこれで安心と、“内容”だけを丸暗記して、貧しい“方法”で、つまり貧弱な表現力で語るのです。そして、その感動的な内容は、伝わらないのです」。また、NHK総合にて放送されている番組『LIFE！～人生に捧げるコント』において、国会中継を模したコントが演じられていた。そこでの「議長」は、だらけきった座り方で滑舌も何も無い平坦な聞き取りにくいダラダラと緩み伸びた話し方で議事を進行していたが、その姿は「あるある！」とリアルに感じるものだった。役を務めていた塚地武雅(1971-)によれば「僕が小さい頃にテレビで見ていた国会中継のマネ」とのこと。

学生からの声には、このようなものもあった。「正直、小学生に表現豊かに話せと要求したところで、と考え

る部分もあります」。この学生が「表現豊か」としているのは「棒読みでない読み方」である。恐ろしい事に、彼らにとっては「棒読み」が…鴻上氏の言を借りれば【貧弱な表現】による言葉の発し方が「普通」なのだ。子どもは「大人のマネ」をする。子どもたちの話し方全ては大人が手本だ。その子どもたちが教育学部を経て大人(先生)になり、子どもの手本となる。これでは「表現」の価値観は、永遠に変わらないのではないか。

【貧弱な表現】について、鴻上氏はこうまとめている。「抑揚のない単調な声。平板な感情、変わらないスピード、聞き手を見ることなく下を向いてひとりごとのように文字を読み続ける態度、丸暗記した言葉をただ繰り返す実感のなさ」。こんなに酷くない、少なくとも私は!という先生もいるだろう。それは素晴らしい。しかし、すべての先生、保護者、メディアに登場する者たち、総じて「大人たち」が、「普通に＝貧弱な表現でなく話す、喋る」ようにならないうちは、子どもたちに『言語活動の充実』は成されないだろう。

筆者の研究領域は音楽であり、「声による音楽表現」が中心であるが、歌唱だけでなく、むしろ「声そのもの」そして「声を用いた表現」こそが興味の対象であり、同時に多くの問題意識を持っている。現代日本における様々な環境において、表現ツールとしての「声」の扱いや認識に問題・課題・不満を抱いている。そして社会に対して好転変化を提案するには、教育現場からの働きかけが最も有効であると考えているが故に、現在自らが籍を置いている「教育学部」という幸運な条件を十二分に生かしたいのだ。【貧弱でない表現】に日常で出会うことは難しく、職業としてなど、一種特別なものであるかのようにされているのが現状である。ならば、その「トクベツ感」を逆にとり、「ドラマ＝劇」としての出会いを教育現場で提供してはどうだろう。【4. 朗読劇…稽古の進行】部分にて取り上げた事々を意識すれば、実現可能である。費用もかからず、必要なのは「意識と知識」のみである。【貧弱でない表現】を経験・体験することで、まずは「貧弱な表現」と「普通の(貧弱でない)表現」の差を理解する価値観と美意識を持つことができる。一度でも「力ある言葉と声による表現」を目指して活動し、その効果を体感していれば、そこから得られた基準によって自身の「表現」を構築していくことができるだろう。必要なのは「具体的な知識と経験」だ。その機会を提供できるのは「教員養成課程」ではないだろうか。

前出の声優 若本規夫氏は、早稲田大学日本語教育研究科教授 戸田貴子氏 主催「日本語教育と音声研究会」、『第14回日本語教育と音声研究会』(2011年2月26日)において基調講演『音声で気持ちを伝える一声優としての音声表現の工夫』を行った。そこで発表された具体的な音声の工夫方法のみならず、「音声表現において最も重要なのは、聞き手に伝えたい内容や気

持ちである」との言葉は、声の達人の物だからこそ大変に重い。自称「言葉の愛撫師」鴻上氏は「内容を発するための声」に注目し、「カリスマ声優」若本氏は「声を発するきっかけである内容や気持ち」に注目している。声が、言葉が発される時、これほどまでに気遣われうることを、だからこそ言葉と声に力がもたらされる事を、本来、声と言葉とはそのようなものでなくてはならないという事を、「大人たち」は知らない、知らなすぎる。これはあまりに罪深く、「貧しい」ことではないだろうか、声を用いる者として筆者は残念に思っている。

東日本大震災後に報道の仕方が変わった。NHKではアナウンス部を中心に「災害時のアナウンス」について見直しが行われた。『東日本大震災報道—NHKの初動から72時間の災害報道を中心に—一田中孝宜(NHK放送文化研究所2014)』によれば、アナウンサーたちは災害発生当初、落ち着いて冷静に伝えていたが、そのことで逆に危機感が十分に伝わらなかったのではないか、という意見が内部からあったという。その改善策として、「警報を伝える際には、冒頭で〔逃げてください〕と呼びかける」「〔…してください〕だけでなく〔…すること〕など、命令調を取り入れる」など文言の見直しや提案のほか、「これまでの落ち着いた口調ではなく、声量を上げるなど緊迫感を伝えるよう表現に工夫を行う」など、より伝わりやすい表現の模索が行われ、実際に施行されている。「声のプロ」たちがこのように動き始めたことも、「声の力、言葉の力」が見直されている現代社会の動きの一部なのではないかと感じている。

朗読劇に携わった学生の一人から、新年度にメールを受け取った。中学の教員として採用され現在教壇に立っている彼女はこう書いていた。「朗読劇の体験が無かったら、私は職員室での新任教員挨拶で、すでに撃沈していたでしょう。体育館で全校生徒に挨拶するとき、色々な事を考えて、なんと自分でリハーサルもしました。朗読劇で得た知識と経験が毎日の私を支えていると言っても過言ではありません」。

「再演を」「新しい企画を」という嬉しい声の後押しを得て、今年も朗読劇Pageant企画の第二回目を執行中である。今回も十数名の教職を目指す学生たちと、「伝える声、伝わる声」を模索し、「声と言葉の力」によって、「何か」を作りだそうとしている。当プロジェクトに関わる彼らが、それを見聞きした学生たちが、これから未来の日本人が「真に、生きる力を持つ者」であるための、素晴らしく魅力的な布石となることを願ってやまない。

【参考】

『あなたの思いを伝える表現力のレッスン』 鴻上尚史／講談社／2012年

『プロアナウンサーに学ぶ 話す技術』梅津正樹／創元社／2009年

『声で勝つ!』唐澤理恵／インデックスコミュニケーションズ／2007年

『あなたの魅力を演出するちょっとしたヒント』鴻上尚史／講談社／2000年

『はじめての声優トレーニング』～声のテクニク編～ 柳谷行宏／(有)雷鳥社／2000年

『日本語教育タイムズ：第14回日本語教育と音声研究会開催—音声で意図や感情を伝えるプロの声優が「伝える音声」を講演』『月刊日本語』50, 64-65

『東日本大震災報道～NHKの初動から72時間の災害報道を中心に～』田中孝宜／NHK 放送文化研究所

『13歳のハローワーク』公式サイト

<http://www.13hw.com/home/index.html>

『声総研』公式サイト

<http://www.koesouken.com/>

『カンロ株式会社』公式サイト

<https://www.kanro.co.jp/>